

# 42.195kmに挑んだ5046人 1993年宮崎大会のマラソン

いよいよ春本番の卯月。身にまとっていた衣を脱いで、野外で空気を胸いっぱい吸い、身体を動かす季節である。だが、いまだに終わりが見えない新型コロナウイルスの流行が——。すでに地域によっては、マスタース陸上のイベント中止が決まっている。今月も、1993年の世界ベテランズを振り返る企画をお届けする。

※文中・年齢は当時

## 五輪4位の実力を発揮 「新人です」の宗猛さん

先月の4月号で「機会があれば」と断っていた1993（平成5）年10月に宮崎県内で行われた第10回世界ベテランズ（当時）選手権のマラソンについてだが、今月号で続けて振り返ってみたい。

マラソンではかつてのトップランナーから市民ランナーまで5046人が42.195kmに挑んだ。スタート点は宮崎市の高千穂通から橘通にかけて。ギャラリーも多く、立すいの余地もないほど埋まった。10月17日午前9時にピストルが鳴った。

まず往年に鳴らしたランナーを紹介する。戦後に日本が五輪初出場した1952（昭和27）年ヘルシンキ大会のマラソン代表だった山田敬蔵さん（神奈川県）はじめ、1964年東京五輪を振り出しに、68年メキシコ大会で銀メダルを獲得、72年ミュンヘン大会に5位入賞した君原健二さん（福岡）や、同じくメキシコ大会ほか、君原さん同様、3大会連続五輪出場の宇佐美彰朗さん（神奈川県）ら。

ほかにも1984年ロサンゼルス五輪で4位に入った宗兄弟の弟で、当時旭化成副監督だった猛さん（宮崎）。マラソンではないが、西都市であった10kmクロスカンントリーには君原さん、宇佐美さんらとミュンヘン大会の代表だった采谷義秋さん（広島）、および采谷さんとの再会を懐かしんだフラン

ク・ショーターさん（アメリカ）も出場した。ショーターさんはミュンヘン大会で金メダリストに輝いたランナーだ。

レース中の最高気温は27.4度だった。

ゴールはタイム差によって第一競技場と第二競技場に分けられた。第一競技場に真っ先に姿を見せたのは宗猛さん。午前11時10分すぎにマイクの声が場内に響いた。「まもなく総合1位のランナーが到着します。地元宮崎の宗猛さんがトップです」。「ワー」と大きな声が沸き上がった。

第1コーナー付近のマラソンゲートから宗猛さんが、頭をやや左に傾けた、あの独特のフォームで姿を。最後の直線コースを観客の声援に応えるように両手を振りながらゴール。ナンバーカード『40 001』を胸にテープを切った。タイムは2時間22分29秒。

「2時間24～25分台を目標にしていた」が、それよりいいタイムだった。当時、ご本人は40歳。「ベテランズでは（参加基準が）40歳からなので、私は全くの新人。先輩たちを差し置いて、トップでゴールしていいのかな、と迷いました」と言って笑った。

13kmすぎからトップに立った宗猛さん、さすが五輪4位の実力を見せつけた。今回は3年ぶりに出場する九州一周駅伝と、12月の防府マラソンの“予行練習”を兼ねて。兄の茂さん（旭化成監督）は「気温の高さを考えると評価できるタイム。猛はまだ2時間12分台の力を維持していますよ」と

話した。

## メキシコ銀の君原さん 13年ぶりの国内大会に

どこにいても人気の君原健二さん（52歳）。レース前日夜の歓迎レセプションの会場でもサインに応じたり、写真を撮ったりと大忙しだった。レースは2時間57分14秒でトップ8までに入らなかったが「目標の3時間を切れたので満足です。でも、こたえたな。しばらくはマラソンは走りたくない」と苦笑い。

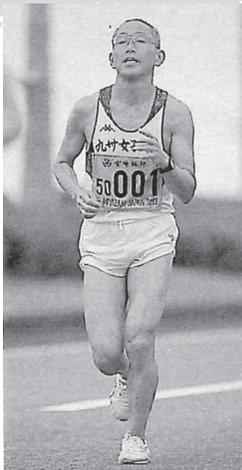
今回、国内でのマラソンは13年ぶりで、通算47回目。現役として走っている時に棄権ゼロを誇った根性のランナー。和子夫人の話では「九州女短大（教授兼陸上競技部長）での学生生活を基本に講演や市民マラソンに招かれたりして時間がなく、今は週に2～3回、10kmを走るのがやっと」とのこと。レジェンドは忙しい日々だ。

ベストタイム2時間10分37秒8（1970年・当時日本記録）を持つ宇佐美彰朗さんは「50歳になった記念に」とレース出場を決めた。ゴールタイムは3時間37分14秒でM50クラスの208位。が、「目標は現役時代のベストタイムの2倍以内で」だったのでクリアできた。

健康のために週に数回、短い距離を走っているが、君原さんと同じく「調整不足で、途中で太ももの筋肉が痛くなって。でも、久しぶりのマラソンレースで楽しかった」と。レースを走り



男子マラソンで一番面白いニッシュした宗猛さん。当時の誌面では「往年の名ランナー復活!!」の見出しで紹介されている



東京、メキシコ、ミュンヘンと3度のオリンピックに出場した君原健二さんはM50に参戦



M65に出場した山田敬藏さん。ボストンマラソンでの活躍は「心臓破りの丘」という映画になった

## レース楽しんだ 芸能界トリオ

芸能界で「走るタレント」として知られている上岡龍太郎さん（51歳）、高石ともやさん（51歳）、間寛平さん（44歳）らが、それぞれのペースで完走し「楽しかった」と口をそろえた。

間さんは3時間40分11秒、高石さんが3時間14分13秒、上岡さんは4時間41分41秒でゴールした。

トリオのうちフォーク歌手の高石さんは参加した感想を日本マスターズ連合が出している会報（記念誌）13・14合併号（1994年）に寄稿している。「楽しかった」の書き出しで「世界ベテランズ陸上のマラソンに完走した印象はこの一言に尽きます」「51歳の私のタイムが良かったのか、悪かったのか、の評価は別にして、日本でスポーツを楽しむ唯一の大会がマスターズ陸上だと思います」（以下略）



以上のように大会を締めくくるマラソンは大盛況のうちに終わった。ちなみに女子の1位は大体大OGの黒崎しのぶさん（35歳・大阪）で2時間58分24秒だった。最高齢は愛知の西郷能男さんで84歳。完走者は4715人。なお、文中・年齢は当時のもの。

ながら「緊張もしたし、リラックスも」と感想を。マラソン練習ができないまま出場した宇佐美さんは、16年ぶりの42.195km完走だった。

## マラソン・アラカルト ボストンの雄・山田さん

ヘルシンキ五輪代表だった山田敬藏さん（65歳）は、翌年の1953年ボストンマラソンで一番乗りし、映画にまでなった。レースでの感想を山田さんは「途中でペース配分を間違えたので、採点すると60点」との評価。

だが、レース結果は目標の3時間30分よりいい、3時間18分07秒でM65クラスの3位だった。マラソンにはしばしば出ており、今大会はこの年の4レース目。この後も「今年中にあと3回はフル（マラソン）に出たい」と、まだまだマラソンに対する情熱を口にした。

埼玉の小島義一さん（51歳）は3時間44分台でゴールし、完走記録を『218回』に伸ばした。タイムを抜きにして、マラソン完走数が驚きだ。「40歳のときにマラソンに挑戦し、以後、病みつきになりました。ゴール後の充実感とか、喜びが素晴らしくて」と、年間20回以上も42.195kmに挑むようになった。

「これからもマイペースでマラソンを走りたい。目標は300回」と。

ベルギーのファン・ノーテン・オメ

ールさん（46歳）は2時間33分03秒で走り、M45クラスで優勝を飾った。マラソンだけではなく。5000m、10000m、クロスカントリーにも勝って四冠を遂げたのだ。

このうち10000mとクロスカントリーは1972年ミュンヘン五輪マラソン金、1976年モントリオール五輪で銀のメダリスト、あのショーターさん（45歳）を破っての値千金のレースだった。

オメールさんは「いい成績を残せてうれしい。宮崎大会は天候にも恵まれたし、すべてにハッピーだった。宮崎は生涯忘れないよ」と、それこそハッピーの笑顔で。

## 訃報

### 大串啓二名誉副会長死去

（公社）日本マスターズ連合の名誉副会長だった大串啓二（おおぐし・けいじ／神奈川県）氏が肺炎のため、2020年3月17日に亡くなり、3月24日に葬儀・告別式が執り行われた。85歳。

（公財）日本陸上競技連盟の前顧問でもあった大串氏は1956年メルボルン、60年ローマ、64年東京各五輪の400mHに出場。メルボルンでは4×400mR、ローマでは4×100mRにも出て、東京五輪では主将を務めた。本マスターズ連合では、かつて理事、顧問などの後、第17期（2012～13年）に副会長を務めた。

### 石川陽子氏死去

2019年9月13日から16日まで群馬県前橋市で行われた第40回記念国際大会の女子砲丸投・W85クラスに国内女子最高齢86歳で出場した石川陽子（いしかわ・ようこ／岩手）氏が2020年3月14日に死去。石川さんは夫の董さんと奥州市に住み、1988年の第9回大会から昨年の第40回大会まで32年間、全日本マスターズ陸上競技大会に夫の董さんと“おしどり参加”していたことで知られていた。近年は砲丸投に出ていたが、以前は1994年の埼玉大会の800mに日本新で優勝したほか、トラックで活躍していた。胃がんなど数々の難病を克服、夫とマスターズ陸上に情熱を持ち続けた。87歳、ご冥福をお祈りしたい。

本文中にもある通り、新型コロナウイルス感染拡大防止のため各地で大会の中止が発表されている。詳しくはマスターズ連合のHPへ。

<https://japan-masters.or.jp/>